

『万葉集』における

建築と環境に関する研究

○ 正会員 張 奕文*1
同 中川 景子*2
同 近藤 正一*3
同 若山 滋*4

【序論】文学の中に現れる風景には自然空間と共に都市及び建築空間が存在する。特に詩歌は、文学の中でも人間の情感の高まりを直接伝えようとするもので、そこに出現する空間は、後世に渡り人の心を強く揺り動かすものである。本研究では、日本の最古の文学の一つである『万葉集』の歌を取り上げ、そこに現れる環境に関する分析を行い、「『万葉集』における建築空間」^(註1)と合わせ、建築空間とその周りの環境的な表現についての関連を明らかにし、古典和歌文学を通じて万葉時代の日本文化における空間情緒性を探ることを目的とする。

【研究対象・方法】本研究では『万葉集』を研究対象とし、以下の考察を行う。①『万葉集』の中から、人間の感覚に関連する環境要素を指す語を環境用語として抽出する。②抽出した頻度の高い建築用語と環境用語についての関連を考察する。③それぞれにかかる修飾語から集中に見られる情感表現との関連を考察する。④文脈を調べ、当時の空間情緒について考察を行う。

【環境用語の出現頻度及びその傾向】抽出により得られた結果を示す表-1と図-1によると、[光]に関する用語が全体の31%を、[自然]に関する用語が23%を占め、[光][自然]に対する関心が強かったことを伺わせる。また、図-2を見ると、「門」「宮」などに関しては[光]の用語の比率が高く、「やど」「いほ」については、自然現象や季節などの比率が増してくる。

【修飾用語から見る空間美意識】修飾用語について考察を行った結果を図-3に示す。建築用語と環境用語との関連を見ると、ある特定の情感表現と深く関わっていることが伺える。例えば、「天」には「高知るや」、「日」には「高照らす」「天の」などの修飾用語がつくが、これは農耕生活を行っていた当時の人間の生活を大きく左右する重要な存在であった為、「天」「日」などは尊いものとして崇められたことによる。それが「家」「宮」と共に歌に用いられると「厳かな、晴れやかな」表現になり、天皇や政治と深く関わってくる。それに対し、「月」「夕」は「朝」や「秋の」などの修飾用語と共に、あまり表沙汰にできないこと、即ち秘めやかな恋や人の死といった表現

表-1 分類別環境用語頻度順位

分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度
光 (430)	天	87	音 (162)	音	26	自然 (139)	雪	36
	朝	67		ほととぎす	24		雨	29
	夜	64		声	19		露	24
	夕	47		言	18		霜	15
	日	35		鳥	18		霧	10
	月	28		うぐひす	13	空気 (144)	しぐれ	7
	雲	26		雁	7		霞	7
	雲居	11		鶺鴒	7		天	87
	火	9		こほろぎ	6		風	30
	昼	7		鶺鴒	4		霧	10
	霞	7		鈴	4		霞	7
	暁	6	熱 (11)	火	9	季節 (116)	秋	55
	曇り	4		氷凝り	1		春	51

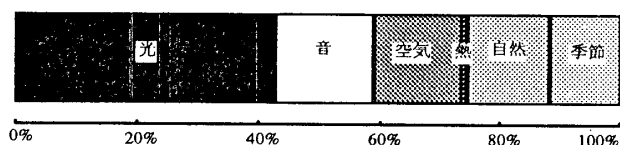


図-1 環境用語分類別構成比

として「やど」「門」と共に用いられている。又「風」は、次元や距離を越えた自由奔放さから「山越しの」「吹く」と共に旅先から「家」を歌う場合に用いられている。「朝」は旅立ちの歌や死を歌ったものに多い。

【文脈から見た人間の情感との関連】建築用語を含む歌をその歌の作者、作られた状況により分類し、そこに含まれる建築用語と環境用語との関連を図-4に示す。政治の場や宴など公の場で歌われたものは作者が明らかになっているが、民衆の間で読まれた歌には作者未詳のものも多い。これは和歌というものが、文化として楽しんで読まれていたのと同時に、和歌の手段でしか自己表現をする他はなかった当時にとっては最も重要な伝達手段の一つであって、誰かの歌ったある歌がそれに共鳴する人々に広く語り継がれて、微妙にその表現を変えながらやがては民謡として存在していった場合が少なくないからである。文脈内容とその関係について見てみると、公的な場面で読まれた歌は「家」「門」「宮」が多く用いられており、それに伴う環境用語には「天」「日」「春」などが多い。これは物理的要素としての「天」や「日」として用いてい

